

戦間期における基軸通貨ポンドの経済的基盤の脆弱化

神戸大学大学院 前田直哉

第一次世界大戦前にポンド・スターリングが唯一の基軸通貨として機能しえたのは、基軸通貨国イギリスと周辺国の間に大きな経済的非対称性が存在し、ポンドを支える経済的基盤が堅固であったためである。しかし、第一次世界大戦後には、両者間の経済的非対称性が縮小し、ポンドの経済的基盤は脆弱化してしまった。

基軸通貨の経済的基盤を考えるにあたり、基軸通貨国の安定的な国際流動性供給という視点から、供給要因として 国際収支構造、 貨幣制度、 金融政策、 および供給の安定条件として A 国際収支調整、 B 内外均衡の同時達成を取り上げる。基軸通貨国からの国際流動性は国際収支赤字(対外短期債務の増加) を通じて供給される。ただし、国際通貨制度次第で、国際収支赤字発生時の基軸通貨国の政策運営スタンス、すなわち金融政策の発動、およびその発動までの時間的余裕が異なり、国際収支赤字の計上に対する制約を大きく左右する。更に、基軸通貨国が国際流動性を安定的に供給するためには、国際収支調整の円滑さに加えて、内外均衡の矛盾無い同時達成が求められる。これら二つの条件を満たさなければ、金融政策の変更(例 . 公定歩合の引き上げ)、あるいは国際収支是正策の発動(例 . 資本移動規制)によって、国際流動性供給が制約されることになるからである。

本報告では、上記の視点から、第一次世界大戦前、戦間期を比較考察し、第一次世界大戦後にポンドの経済的基盤が脆弱化してしまった原因を浮き彫りにしたい。第一次世界大戦前は 1870~1913 年、戦間期は 1925~1933 年の期間を考察対象とする。

< 公表論文 >

前田直哉(2000) , 「1870~1913 年における基軸通貨ポンドとその経済的・金融的基盤」『六甲台論集』(神戸大学大学院)第 47 巻第 2 号 , 19-38 ページ。

前田直哉(2001) , 「1920 年代における基軸通貨ポンドの経済的基盤の脆弱化」『経済学論集』(龍谷大学)第 40 巻第 3・4 号 , 49-66 ページ。